

自然教育園の動物目録の追録と 稀種動物の目撃記録 (5)

久 居 宣 夫*

Notes on Newly or Rarely Observed
Animal Species in the Institute
for Nature Study (5)

Nobuo Hisai*

は じ め に

今回は、1991年1月～1992年12月に新たに生息が確認されたり、目撃された種あるいは前報（久居，1991）までに記録がもれた種について報告する。稀種については、「動植物目録」（国立科学博物館附属自然教育園，1984）中で、r：“稀”，または（r）：“古い記録はあるが、現在未確認の種”とされている全ての種を対象にしたが、これら以外にも最近特に個体数や目撃記録が著しく減少した一部の種も対象とした。

なお、学名および和名などは上記の目録に準拠した。また、カッコ内の日付は目撃あるいは捕獲した西暦年月日（日付のないものはふつうに見られることを示す）と目撃または捕獲地点と目撃者、捕獲者名を示し、氏名のない場合は著者の記録によるものを示す。

本報告をまとめるにあたって、種々のご教示と同定をいただいた東洋大学の太野正男教授、国立科学博物館動物研究部の友岡雅章氏、同小野展嗣氏、同篠原明彦氏、日頃より貴重な記録を提供していただいている日本野鳥の会の守田洋氏をはじめ、情報を提供くださった方々に感謝の意を表する次第である。

1. 追 録

Arthropoda 節足動物門

Arachnida 蛛形綱

Xysticus insulicola Bös. et Str. アズマカニグモ（真正クモ目 カニグモ科）（1991. 6.12 建物跡地）
小野展嗣氏同定

建物跡地（図1参照）の草地を徘徊している雌の成体を捕獲。本種は本州・四国・九州に分布するが、

* 国立科学博物館附属自然教育園, Institute for Nature Study, National Science Museum

本州の中部以北には少ないという（千国, 1989）。

Insecta 昆虫綱

Legnotus triguttulus Motschulsky

ミツボシツチカメムシ（半翅目 ツチカメムシ科）（1992.4.12 食草園）
友国雅章氏同定

インセクトリウム脇の堆肥中に潜んでいた個体を見つけて捕獲した。

本種は体長 5 mm 内外で、体色は紫藍色を帯びた黒色で光沢があり、小楯板の先端と前翅革質部のほぼ中央に黄白色の紋をもつ。国内での分布は北海道・本州・四国・九州。

成虫は 4～5 月頃、オドリコソウ上で生活するといわれている（宮本, 1965a；日浦, 1977a）。しかし、本園では武蔵野植物教材園にオドリコソウの小さな群落があるものの、インセクトリウムおよび食草園付近には生育していない。川沢・川村(1977)によれば、本種はオドリコソウのほか、ヒメオドリコソウも好むという。オドリコソウ

と同属の、この帰化植物は食草園付近にも多く生育しているので、本園ではヒメオドリコソウ上でも生活している可能性がある。

なお、雌は交尾後地中に卵塊を産み、それを保護する習性をもつことが知られている（宮本, 1965a；日浦, 1977a）。最近になって、本種が卵の保護だけではなく、幼虫への給餌行動が報告された（中平, 1991）。また、カメムシ類の雌による卵保護と給餌行動はベニツチカメムシでも発見されており、塚本・藤條(1992)によって詳細に報告された。これら異翅半翅類における給餌行動は、昆虫類の社会性進化の面で注目されている。

Acanthosoma labiduroides Jakovlev ハサミツノカメムシ（半翅目 ツノカメムシ科）（1991.8.1 森の小道）友国雅章氏同定

森の小道の入口付近で、ケヤキの樹幹に止まっている雄を捕獲。

自然教育園では、青木(1989)の1988年9月16日に次いで2例目の記録であり、本園で繁殖している可能性もある。

本種の雄は、尾部に赤色のハサミ状の長い突起をもつ。国内では北海道～九州に分布する。おもに山

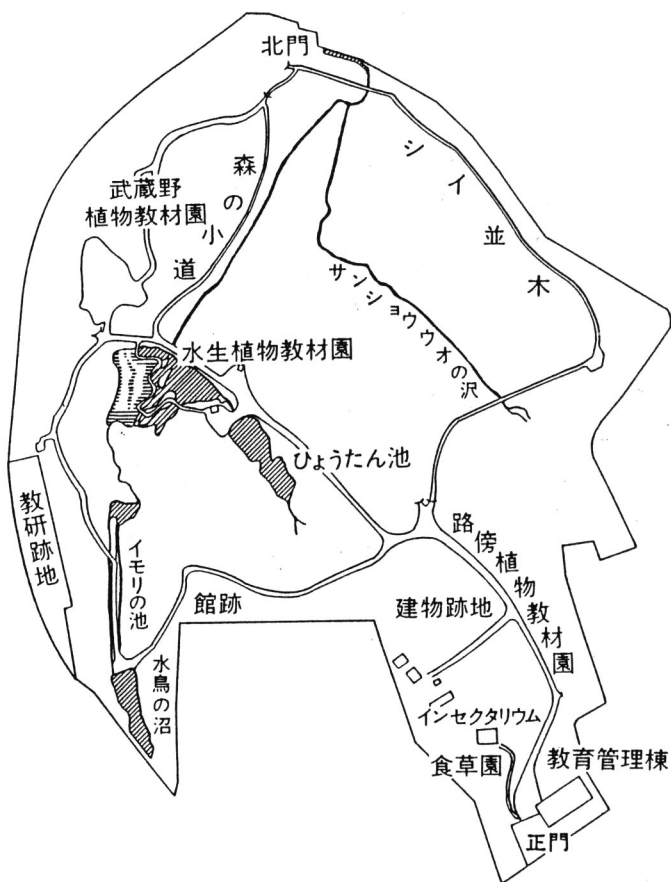


図1. 自然教育園概略図

地に多く生息し、平地や低山地での記録は少ないという（宮本, 1965b ; 鈴木, 1981）。しかし、横浜市内での採集記録（芦沢, 1985）や、兵庫県の神戸大橋上で多数のオオツノカメムシおよびエサキモンキツノカメムシなどと共に本種が採集された記録もある（高橋, 1985）。

本種は主としてミズキなどの落葉広葉樹上で生活するが、ミツバウツギ・ヤマウルシ・ツタウルシ・イヌザンショウなどからの記録もある（川沢・川村, 1977）。

Physopelta gutta Burmeister オオホシカメムシ（半翅目 オオホシカメムシ科）（1992.10.9 インセクタリウム前）友国雅章氏同定

インセクタリウムの戸に止まっている個体を捕獲。

本種は体長18mm内外で、橙褐色の地に革質部に丸い黒色紋をもつ。分布は本州・四国・九州・石垣島である（宮本, 1965c）。海岸近くの森林に生息し、アカメガシワの花穂に成虫・幼虫共よく集まるといい（日浦, 1977a）、あまり内陸部には分布しないらしい（友国氏のご教示による）。また、高知県の西部では、10月頃ウンシュウミカンを吸汁加害することが知られている（川沢・川村, 1977）。

本種が捕獲されたインセクタリウムのすぐ近くには、大きなアカメガシワが生育しているので、捕獲された個体も、おそらくこの木の樹上で生息していたのであろう。本園にはアカメガシワが多く生育しており、本種が繁殖している可能性が十分にある。

なお、1984年発行の「動植物目録」のホシカメムシ科の項(p.70)に登載されているヒメホシカメムシ *Physopelta cincticollis* Stål の所属はオオホシカメムシ科の誤りである。ここに訂正しておく。

Exosoma flaviventre Motschulsky キバラヒメハムシ（鞘翅目 ハムシ科）（1991.6.7, 1992.4.23 食草園）大野正男氏同定

食草園の草地にいた個体を捕獲。

体長5mm内外で、背面は青藍および緑藍色を帯びた黒色、体腹面は腹部のみ黄褐色。

国内での分布は北海道～九州であり、食草はコナラやノリウツギの花である（中根, 1963; 木元, 1984）。

Proanoplomus japonicus Shiraki ミツボシハマダラミバエ（双翅目 ミバエ科）（1992.4.3 教育管理棟内 松井礼子氏; 同4.14インセクタリウム内）

本種は教育管理棟内とインセクタリウム内で各1個体ずつ捕獲された。分布は北海道～九州である（伊藤, 1965）。

本園でこれまでに記録されているミバエ類は、種名が明らかなもの4種と不明種5種である（鶴田他, 1952）。新たに記録された本種を含め、今後調査が進めば、さらに多種の記録が考えられる分類群である。

Dolerus subfasciatus Smith スギナハバチ（膜翅目 ハバチ科）篠原明彦氏同定

本種は1992年4月15日に捕獲されたが、建物跡地に春季多数発生している。建物跡地には本種の食草であるスギナが繁茂しており、毎年繁殖を繰り返していると考えられる。分布は本州である（富樫, 1965）。

Vertebrata 脊椎動物門

Aves 鳥綱

Accipiter gularis gularis Temminck et Schlegel ツミ (ワシタカ目 ワシタカ科) (1991.9.25 水生植物教材園 守田洋氏)

水生植物教材園のベンチ前に生育するジャヤナギに止まっている個体が目撃された。

夏の繁殖期は低山帯の雑木林などに生息するが、秋には山麓の林や人里近くの農耕地にも稀ではないという(清棲,1966; 小林,1976)。

2. 稀 種 の 記 録

(1) 昆 虫 類

Ceragrion melanurum Selys キイトンボ (蜻蛉目 イトンボ科) (1992.7.31 水生植物教材園 守田洋氏; 同8.1 水生植物教材園)

本種は、個体数は少ないが毎年のように発生する。1992年は7月31日に1個体、8月1日に2個体の目撃記録があるものの、最近徐々に減少する傾向が見られる。この原因の一つとして、本種の主な繁殖池である、水生植物教材園のアサザ植栽地付近の湿地が時々初夏～秋に枯渇することが考えられる。本種の越冬幼虫は、生息場所の水が干上がっても、若齢幼虫がガマやスゲ類の枯れ葉の中で生存しているのを見いだされ、低温・乾燥に強い耐性をもつことが示唆されている(新井,1983)。しかし、キイトンボと同様に、ヤブヤンマの場合も生息場所の冬季の枯渇には耐性をもち長期間生存できる(新井,1988)のに対して、夏季の枯渇では脱皮直前に死亡する例が知られている(新井,1985)。このことから、キイトンボも夏季の枯渇は幼虫の生存にかなり影響すると考えられる。

国内では青森県～屋久島まで、離島も含めて広く分布し、幼虫は平地の挺水植物が多い池沼に生息する(浜田・井上,1985; 石田他,1988)。

Polycanthagyna melanictera Selys ヤブヤンマ (蜻蛉目 ヤンマ科) (1991.6.14 武蔵野植物教材園 守田洋氏)

本種は1952年の「昆虫目録」(鶴田他,1952)に記録されているが、一度絶滅したと考えられたトンボの一種である。その後、1989年守田洋氏によって、武蔵野植物教材園の小池で羽化個体が再見され、本園での繁殖が継続するか否か注目されていた(久居,1990)。

今回の記録は、同じく守田洋氏によって、武蔵野植物教材園の小池で産卵中の個体が目撃されたものである。したがって、毎年とはかぎらないが、飛来した個体によって今後も時々繁殖する可能性が十分にある。

幼虫は丘陵地および低山地の、植物堆積物が多い木陰の池沼に生息する。山本(1974)によれば、雌は降雨時にも、これに影響されることなく産卵行動を行い、新井(1988)は降雨水でできた水たまりにも幼虫が生息するのを観察している。

Orthetrum japonicum japonicum Uhler シオヤトンボ (蜻蛉目 トンボ科) (1991.5.25 水生植物

教材園 守田洋氏)

毎年ではないが、たまに目撃される。おそらく他所で発生した個体が飛来したものであろう。本種は日本の特産亜種で、北海道～種子島まで広く分布し、トンボ類の中では比較的早い時期に出現する。

Rhyothemis fuliginosa Selys チョウトンボ (蜻蛉目 トンボ科) (1992.7.23 水生植物教材園 頼惟勤氏; 同8.1 水生植物教材園 守田洋氏)

本種は水生植物教材園で2回目撃されているが、この間ずっと同一個体が園内に滞在していた可能性がある。同様の例は、1990年7月30日～8月5日にやはり水生植物教材園で同一個体と考えられる本種が観察された記録がある(久居,1991)。

本種は一時期全く出現しなかったが、この数年はほぼ毎年1～2個体目撃されるようになった。

国内では本州～種子島まで離島も含めて分布し、西南日本に多い。しかし、関東以北では少なく、東北地方北部では産地が局地的で稀である。幼虫は、おもに平地や丘陵地の水生植物が繁茂する池沼に生息するが、近年環境破壊が進み減少しつつあるという(浜田・井上, 1985)。

Mantispa japonica MacLachlan ヒメカマキリモドキ (脈翅目 カマキリモドキ科) (1991.8.22 インセクタリウム)

インセクタリウム内にいる個体を捕獲。本種も1952年の「昆虫目録」(鶴田他,1952)に登載されているが、その後全く目撃記録がなかった。

国内では北海道～九州、対馬と広く分布し、各地の山地で7～8月に比較的ふつうに生息する。

本種の幼虫はエドコマチグモの卵のうに寄生するという(石原, 1965; 日浦,1977b)。しかし、岸田久吉氏によってつけられたエドコマチグモの学名には記載が全くない。そのため無資格名(nomen nudum)とされ、現在は使用されていない。したがって、エドコマチグモが既知の8種のコマチグモ類(*Chiracanthium*) (八木沼他,1990)のどの種を指すのか、あるいはこれらとは別種なのか明らかではない(大野正男氏のご教示による)。

Antigius attilia Bremer ミズイロオナガシジミ (鱗翅目 シジミチョウ科) (1991.6.7 イモリの池および水生植物教材園 守田洋氏)

本種は毎年のように少数個体が観察される。1991年の記録は上記の場所で各1個体が目撃されたものであるが、守田氏によると、別個体であつたらしいとのこと。

平地の雑木林が伐採され、ゼフィルス類が消滅する中であって、本種はわずかながらも今なお都内に生息し、都市型遺存種(福田,1988)ともいえる貴重なゼフィルス類の一種である。1980年以後も都内で生息が確認されているのは、本園以外に練馬区・杉並区・板橋区・目黒区である(西多摩昆虫同好会,1991)。

Curetis acuta Moore ウラギンシジミ (鱗翅目 シジミチョウ科) (1991.10.19 食草園; 1992.9.16 水生植物教材園; 同9.20 食草園)

本種は秋季の目撃例が多いが、1989年と1990年には夏季にも目撃され、本園での繁殖が示唆されている(久居,1990,1991)。

食餌植物は、マメ科のフジ・クララ・クズ・ジャケツイバラなどである。成虫は訪花性があまりなく、カキ・リンゴ・イチジクなどの腐果のほか、樹液、カエル・トカゲなど小動物の死体、ウシ・イヌ・鳥などの糞からの吸汁が観察されている（福田他, 1984）。著者も車による轢死と考えられるシマヘビで吸汁している本種を目撃している（図2）。このほか、変わった例としては、キノコ類のキヌガサタケでの吸汁が報告されている（飯田, 1985）。



図2. シマヘビで吸汁するウラギンシジミ

Libythea celtis Fuessly テングチョウ
(鱗翅目 テングチョウ科)

(1991.4.21 水鳥の沼 守田洋氏; 1992.4.9 教育管理棟前; 同4.17 食草園; 同4.21 建物跡地前)

本園での目撃例は4月頃に集中する傾向はあるが、夏季にも時々見られ、園内のエノキで繁殖していると考えられる。

Parantica sita Kollar アサギマダラ (鱗翅目 マダラチョウ科) (1992.9.20, 同9.29~30 路傍植物教材園および武蔵野植物教材園 以上守田洋氏; 同10.2 武蔵野植物教材園 松井礼子氏)

今回の目撃記録は、1992年の9月20日~10月2日に集中している。おそらく、本園に飛来した同一個体がこの間園内に留まっていたのであろう。

本種は花蜜を好みオカトラノオ・ヒヨドリバナ・ホトトギス・ツリフネソウなど種々の花で吸蜜する（福田他, 1982）が、動物の死体（ヘビ）で吸汁した例も知られている（西口, 1983）。

Argynnis paphia Linnaeus ミドリヒョウモン (鱗翅目 タテハチョウ科) (1992.9.26 水生植物教材園)

本種は一時期、夏季も含めてかなりの目撃記録があり、本園に定着したようにも考えられた（久居, 1989）。しかし、最近また目撃例が減少している。本種はかなりの個体が山地から平地に移動することも示唆されており（斉藤, 1979; 福田他, 1983; 福田, 1988）、今回の記録が初秋のものであることから、移動個体の可能性が大きい。

Atrachya menetriesi Faldermann ウリハムシモドキ (鞘翅目 ハムシ科) (1991.9.5 食草園)

本種は1990年11月8日に初記録されたハムシで、今回も食草園の草上にいた黒色タイプの個体が捕獲された。前報（久居, 1991）で食草園に多いミツバやシロツメクサなどで多発する可能性もあることを示唆したが、その後の観察では、今のところこのような現象は見られない。

(2) そ の 他

Gekko japonicus Duméril et Bibron ニホンヤモリ (トカゲ目 ヤモリ科) (1992.4.2 教育管理棟内)

教育管理棟内の車庫の戸に付いている個体を捕獲。全長約40mmの幼体であった。体長を計測後、捕獲地点の近くに放逐した。

本種は、以前にも車庫内のコンクリート壁で幼体を目撃している (久居,1989)。産卵は戸袋などで行うといわれ (千石,1979)、ふだん人の出入りが少なく、またかくれ場所の多い車庫内で繁殖しているものと考えられる。

Elaphe conspicillata Boie ジムグリ (トカゲ目 ナミヘビ科) (1991.5.11 インセクトarium付近 矢野亮氏)

目撃された個体は体長30~40cmの幼蛇である。矢野氏によれば、正確な記録はないが、これ以外にも1~2回園内で目撃したとのこと。

本園には現在4種のヘビが生息しているが、その中で本種の目撃例がもっとも少ない。本種は特に夜行性というわけではないらしいが、主に林内に生息することや、物陰に隠れたり、地中に潜る習性があるために人目につきにくいのであろう (中村・上野,1963; 千石,1977)。

Ardea cinerea jouyi Clark アオサギ (コウノトリ目 サギ科) (1991.10.15 水生植物教材園)

本種は稀に本園で目撃される。今回の記録は水生植物教材園で守田氏と共に目撃したものである。

引 用 文 献

- 青木良. 1989. 昆虫類. 「港区生物現況調査報告書」, 98-178. (東京都港区都市環境部環境対策課).
- 新井裕. 1983. 干上がった湿地におけるトンボ幼虫の越冬生態. 月刊むし, (146):15-17.
- . 1985. 水が干上がった時のヤブヤンマ幼虫の行動. インセクトarium, 22(6):22-23.
- . 1988. ヤブヤンマ幼虫の生態と形態. 昆虫と自然, 20(10):24-27.
- 芦沢一郎. 1985. 神奈川県横浜市でハサミツノカメムシを採集. 月刊むし, (172):41.
- 千国安之輔. 1989. 写真・日本クモ類大図鑑. 308pp. 偕成社, 東京.
- 福田晴男. 1988. 移りゆく東京のチョウ. 「都市の昆虫誌」(長谷川仁編), 135-178. 思索社, 東京.
- 福田晴夫ほか8名. 1982. 原色日本蝶類生態図鑑 (I). 277pp. 保育社, 大阪.
- 福田晴夫ほか8名. 1983. 原色日本蝶類生態図鑑 (II). 325pp. 保育社, 大阪.
- 福田晴夫ほか8名. 1984. 原色日本蝶類生態図鑑 (III). 373pp. 保育社, 大阪.
- 浜田康・井上清. 1985. 日本産トンボ大図鑑. 第2巻解説編:129-291. 講談社, 東京.
- 久居宣夫. 1989. 自然教育園の動物目録の追録と稀種動物の目撃記録(2). 自然教育園報告, (20):1-13.
- . 1990. 自然教育園の動物目録の追録と稀種動物の目撃記録(3). 自然教育園報告, (21):11-21.
- . 1991. 自然教育園の動物目録の追録と稀種動物の目撃記録(4). 自然教育園報告, (22):1-6.
- 日浦勇. 1977a. 半翅目 (異翅亜目). 「原色日本昆虫図鑑 (下)」, 全改訂新版 (伊藤修四郎他編),

- 95-129. 保育社, 大阪.
- . 1977b. カマキリモドキ科. 「原色日本昆虫図鑑 (下)」, 全改訂新版 (伊藤修四郎他編), 180. 保育社, 大阪.
- 飯田守幸. 1985. ウラギンシジミ成虫の吸汁行動の1例. 月刊むし, (175):41.
- 石田昇三・石田勝義・小島圭三・杉村光俊. 1988. 日本産トンボ幼虫・成虫検索図説. 72pls + 105figs + 140pp. 東海大学出版会, 東京.
- 石原保. 1965. カマキリモドキ科. 「原色昆虫大図鑑第3巻」(朝比奈正二郎他監修), 157-158. 北隆館, 東京.
- 伊藤修四郎. 1965. ミバエ科. 「原色昆虫大図鑑第3巻」(朝比奈正二郎他監修), 221-224. 北隆館, 東京.
- 川沢哲夫・川村満. 1977. 原色図鑑改訂カメムシ百種. 301pp. 全国農村教育協会, 東京.
- 木元新作. 1984. ハムシ科. 「原色日本甲虫図鑑 (Ⅳ)」(林匡夫他編著), 147-224. 保育社, 大阪.
- 清棲幸保. 1966. 野鳥の事典. 413pp. 東京堂出版, 東京.
- 小林桂助. 1976. 原色日本鳥類図鑑, 増補改訂新版. 248pp. 保育社, 大阪.
- 国立科学博物館附属自然教育園. 1984. 国立科学博物館附属自然教育園動植物目録. 118pp.
- 宮本正一. 1965a. ツチカメムシ科. 「原色昆虫大図鑑第3巻」(朝比奈正二郎他監修), 75pp. 北隆館, 東京.
- . 1965b. ツノカメムシ科. 「原色昆虫大図鑑第3巻」(朝比奈正二郎他監修), 80-82pp. 北隆館, 東京.
- . 1965c. オオホシカメムシ科. 「原色昆虫大図鑑第3巻」(朝比奈正二郎他監修), 89pp. 北隆館, 東京.
- 中平太一. 1991. ミツボシツチカメムシの給餌行動. 日本昆虫学会第51回大会・第35回日本応用動物昆虫学会大会合同大会講演要旨, 246.
- 中村健児・上野俊一. 1963. 原色日本両生爬虫類図鑑. 214pp. 保育社, 大阪.
- 中根猛彦. 1963. ハムシ科. 「原色昆虫大図鑑第2巻 (甲虫篇)」, 320-348pp. 北隆館, 東京.
- 西口達郎. 1983. アサギマダラ♂が動物死体で吸汁. 月刊むし, (148):34.
- 西多摩昆虫同好会編. 1991. 東京都のチョウ. 200pp. けやき出版, 東京.
- 斉藤秀昭. 1979. ミドリヒョウモンが里へ大飛来. 月刊むし, (97):30.
- 千石正一編. 1979. 原色両生・爬虫類. 206pp. 家の光協会, 東京.
- 鈴木裕. 1981. 神奈川県異翅半翅類. 「神奈川県昆虫調査報告書」(神奈川県教育庁社会教育部文化財保護課編), 189-213. (神奈川県教育委員会).
- 高橋寿郎. 1985. 神戸大橋上にオオツノカメムシが多数飛来. 月刊むし, (167):32.
- 富樫一次. 1965. ハバチ科. 「原色昆虫大図鑑第3巻」(朝比奈正二郎他監修), 245-252. 北隆館, 東京.
- 塚本リサ・藤條純夫. 1992. ベニツチカメムシの繁殖と給餌. インセクトリウム, 29(5): 4-10.
- 鶴田総一郎他. 1952. 国立自然教育園動物目録第1集昆虫綱. 国立自然教育園基礎資料, (1):1-42. (国立自然教育園).
- 八木沼健夫・平嶋義宏・大熊千代子. 1990. クモの学名と和名 -その語源と解説-. 287pp. 九州大学出版会, 福岡.
- 山本悠紀夫. 1974. 降雨時に産卵をするヤブヤンマ. 月刊むし, (37):31.